

由比から見た現代農業が持つ意味

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-02-24
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 猪原, 康孝
	メールアドレス:
URL	所属:
	http://hdl.handle.net/10297/9318

由比から見た現代農業が持つ意味

猪原康孝

- 1 はじめに
- 2 調査地概要
 - 2.1 由比の自然条件
 - 2.2 由比の農業史
 - 2.3 現在の由比の農業
- 3 専業農家の農
 - 3.1 やりがいを求めるベテラン農家
 - 3.2 利益も重視する若手農家
 - 3.3 専業農家における傾向
- 4 半農半漁の農
 - 4.1 兼業としての漁業をする農家
 - 4.2 半農半漁をしている方の傾向
- 5 日本の農業を支えるもの

1 はじめに

静岡県静岡市清水区の駿河湾沿いに面する由比に初めて足を踏み入れた印象は「坂道の町」だ。平坦な道はわずかで、移動に上りと下りを繰り返さなければならず、じりじりと体力が消耗される。それは農業においても同様だ。農作業をするには一見向いていなさそうな傾斜地に、ミカンなどの柑橘類の樹木が立ち並び、太陽が照り付ける中、おばあさんが農作業に勤しんでいる。ところどころに見られる荒れた畑がそこでの農作業の困難さを物語っている。

現在日本では、農業従事者の減少、高齢化が進んでおり、農業は一見衰退気味な産業に映る。しかし、その中で農業に従事している人たちを支えているものは何なのだろうか。由比の農家の方へのインタビューを通じてその理由を探る。

2 調査地概要

2.1 由比の自然条件

由比は三方向が山に囲まれており、南は駿河湾に面する海岸沿いにわずかに平坦地があ

る程度でほとんどが丘陵地や山地でおおわれている。

由比が属する静岡市南部の気候は極めて温暖で、夏季は高温多湿、冬季は温暖少雨の太平洋型気候区に属している。ウェブサイトによれば、年間を通じて温暖な気候で、近傍の静岡地方気象台（静岡市駿河区曲金）における年平均気温は 16.3 度（1979（昭和 54）年から 2010（平成 22）年までの 31 年間平均）である。年平均降水量は約 2,320 ミリメートル（同）であり、全国平均の約 1,700 ミリメートル（同）に比べて多く、月別平均の降雨量を見ると、梅雨時期及び台風襲来時期の 6～9 月は降水量が多く、冬季の 12 月、1 月は少なくなる（静岡県交通基盤部河川砂防局河川企画課）。

温暖な気候と傾斜地はミカン栽培に適しており、山稜の東斜面部は 40 度以上の急斜面が多く、林地となっているが、山麓部の寺尾・西山寺・白井沢にかけての地域は、傾斜が緩く樹園地として広く利用されている（由比町史編纂委員会 1989）。以下ここでは、地名の後に地区とつける。

2.2 由比の農業史

由比の柑橘栽培の発祥は、1786（天明 6）年、紀州出身の林香寺住職が、この地方の気候風土が紀州によく似ているため、ミカンの苗木 500 本を取り寄せ植えたことであると伝えられている。このミカンは現在と同じミカンではなく、果実の小さいものであった。しかし、第 2 次世界大戦の際、食糧不足のため、林香寺のミカンはサツマイモ畑などに変えられてしまい、現在当時のミカンの木は残っていない。

現在は、由比で出荷される農作物の 9 割が柑橘類であるが、明治初年頃までの農業はほとんど自給自足のため、コメ、ムギ、イモ、ソバ、野菜類が中心であった。農商務省が設置された 1881（明治 14）年、大日本農会が創設され、静岡県下の各町村も農会を設立した。当時ミカンが次第に普及し始め、由比町が属する庵原郡では、柑橘関係者によって柑橘同業者組合が設立され、積極的な奨励策が展開された。品評会、講習会が開かれ、柑橘類の知識・栽培方法の普及がはかられ、苗木を導入して農家に配布し、接ぎ木技術を研修して従来の小ミカンを新種の「温州みかん」に接ぎ換えさせることが進められた。県下の温州ミカンは年毎に増加し、1911（明治 44）年には県内の栽培規模、生産高で庵原郡が第 1 位を占め、このころ由比の農家もミカン商人として知られていた（由比町史編纂委員会 1989）。

戦時中の 1942（昭和 17）年に食糧管理法が公布され、戦時食糧政策による柑橘産業への圧制が厳しくなり、柑橘無用論まで出て、全国の柑橘園は荒廃の一途をたどった。しかし、こうした状況下にあつて、静岡県の柑橘類だけは、柑橘関係者有志の伐採阻止の運動の成果もあり、徹底的な大量伐採から免れた。このため戦後、1950（昭和 25）年から 1951（昭和 26）年を契機として、静岡県の柑橘産業はいち早く復興しており、1951（昭和 26）年、由比町農業協同組合では中断していたミカンの販売取扱を再開している。昭和 20 年代から 40 年代には、県外からは長野・山梨・東北、県内からは富士方面、駿東方面から、泊まり込んでみかんの収穫の応援に来る援農がいるほど由比町でのミカンづくりは盛んであった。

しかし、1972（昭和 47）年から 1974（昭和 49）年のみかんの大豊作による価格の暴落を機に、1991（平成 3）年のオレンジの輸入自由化による国内のミカン消費量の減少、高齢化にともなう耕作放棄地や遊休農地の増加、農業就業者人口の減少が生じていった。（由比町史編纂委員会 1989）。

2.3 現在の由比の農業

2010 年由比の総農家数は 300 戸（図 1）で、うち販売農家（経営耕地面積が 30 アール以上または農産物販売金額が 50 万円以上の農家）は 154 戸、自給農家（経営耕地面積が 30 アール未満かつ農産物販売金額が年間 50 万円以下の農家）は 146 戸となっている。さらに販売農家のうち、29 戸が専業農家（世帯員のなかに兼業従事者が 1 人もいない農家）、125 戸が兼業農家（世帯員のなかに兼業従事者が 1 人以上いる農家）である。兼業農家のほとんどはアルバイトや会社員であるが、由比の特色として半農半漁をする人もいる（由比においては漁業に従事しつつ、兼業として農業をする形態を半農半漁とする）。ミカン産業全盛期と言われる昭和 30 年代と 2010 年のデータを比較すると、農家戸数は約 4 分の 1（図 1）、耕地面積は 5 分の 1（図 2）に減少している。また農業就業者のうち最も多い年代が 60～70 代である（図 3）。以上のデータから由比の農業は、規模の縮小化、また高齢化が進んでいることがわかる。

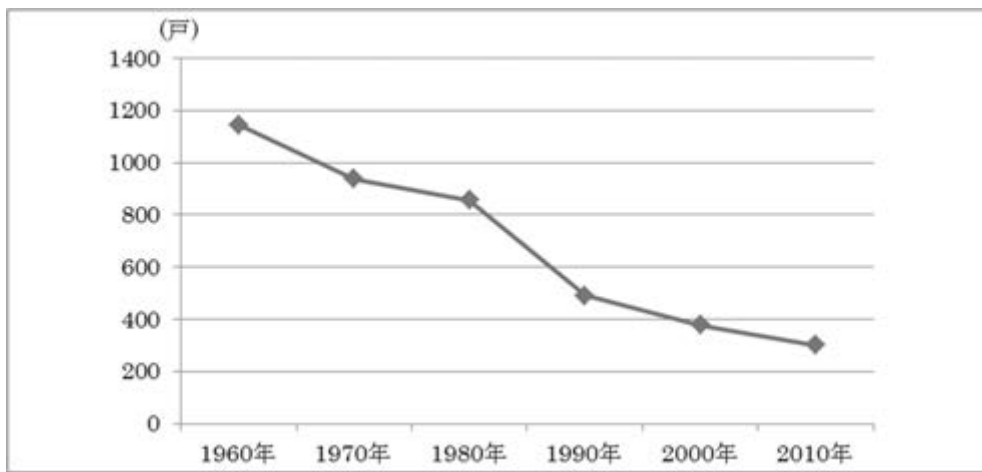


図 1 由比における農家戸数の推移

（1960 年から 2000 年は旧由比町のデータ）

出典：農林水産省 2012、農林水産省統計情報部 1962、1971、1981、1991、2001 をもとに
猪原作成

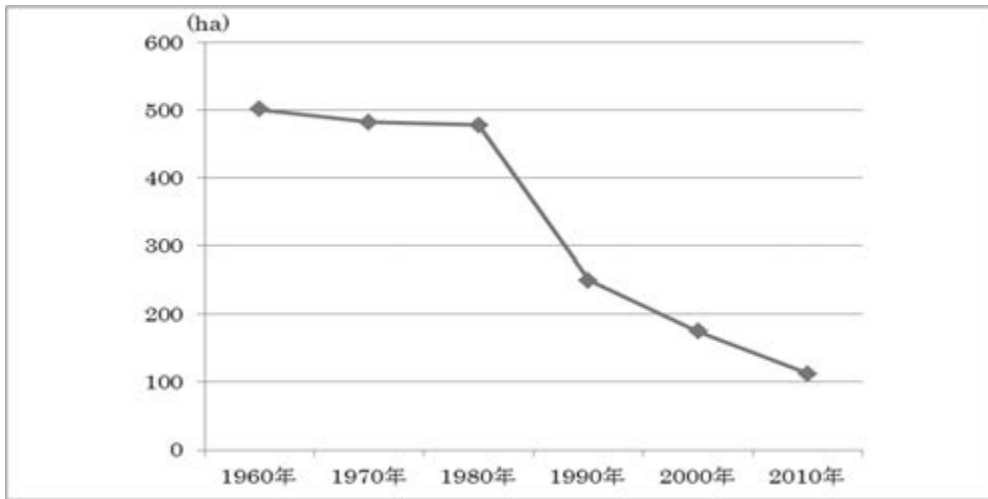


図2 由比における耕地面積の推移

(1960年から2000年は旧由比町のデータ)

出典：農林水産省 2012、農林水産省統計情報部 1962、1971、1981、1991、2001 をもとに
猪原作成

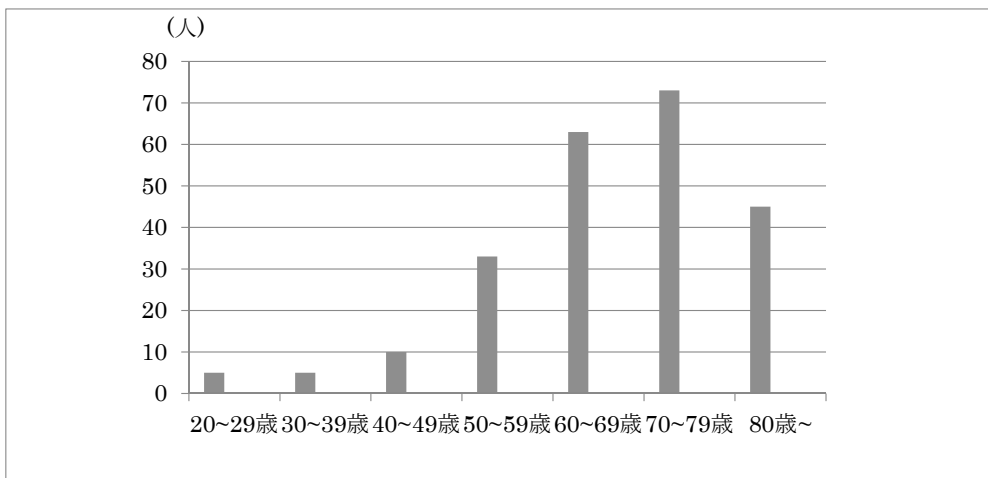


図3 2010年における由比の年齢別農業就業人口専業農家。

出典：農林水産省 2012 をもとに猪原作成

一方、衰退しつつある農業ではあるが、一部の意欲的な農家による中晩柑などの新品種の導入や西山寺・阿蘇地区における土地改良の「県営担い手育成畑地帯総合整備事業」などの農業生業基盤の整備を進めている（由比町史編纂委員会 2008）。

また由比地区の農業機関は、1895（明治 28）年に設立された由比町農会、1908（明治 41）年に設立された由比町信用購買販売生産組合を皮切りに、1944（昭和 19）年に由比町農会と由比町信用購買販売生産組合を統合した由比町農業会、1948（昭和 23）年に由比町農業会が解散し設立された由比町農業協同組合、1992（平成 4）年に由比町農業協同組合と蒲原町農業協同組合が合併されたするが路農業協同組合となり、現在は 2012（平成 24）年にするが路農業協同組合を含む清水区内の事業所を統合した清水農業協同組合に所属している。

3 専業農家の農

由比で農業を営むことについて、当事者たちがどのように考えているのかを知るために、専業農家という立場で農業を営む人たちに、農について語っていただいた。

3.1 やりがいを求めるベテラン農家

60 代の農家の方 2 人に自身の農業史、農業観についてのお話をうかがった。以下はその語りである。

A さん（男性、68 歳、寺尾地区在住）

20~24 歳くらいまで寺尾地区で専業農家として働いており、ミカンやビワを育てていたが、みかんの価格低迷などにより採算が合わなくなり、会社員に転職した。会社員時代も日曜日に少し農地の手入れをし、定年退職後に専業で農業を再開した。現在はほとんどの農地を荒らしており、自分が食べる分と軒先で直販する程度の量のみを生産している。

農業をする動機は、せっかく農地があるため、それを利用した老後の健康維持や自分の農作物を通じたコミュニケーションの楽しみを得るためである。寺尾地区はサラリーマンに転職していった人、また老後の健康維持として農業をする人が多いという。

B さん（男性、66 歳、東山寺地区在住）

家は代々専業農家であり、教員になりたかったが、父が体調を悪くし、当時は長男が家を継ぐ風潮があったため、農業を始めた。昭和 30~40 年頃は東北を中心に出稼ぎの人が多く来て、B 家も 2, 3 人雇っていた。昭和 40 代年後半になってミカン産業が衰退し始めたのを機に、多くの農家が漁業、建設業、塗装業などの自由がきく日雇いの兼業を始めた。そのまま他の仕事へ移って行った農家は多いという。B さんも 30 歳ごろから 3 年間ほど収入を増やすため建築業の手伝いをしていたが、興津試験所で開発された新品種の登場により収入の目途が立ったため、専業農家に戻った。しかし、このような B さんのケースは珍しいという。

以前は 11 月~12 月が収穫期であったが、多品種を植え、11~5 月まで収穫時期を分散することで、少人数での作業を可能にしている。ミカン産業が衰退する前は農作物をすべて農協

に出していたが、今は農協と直販とで半々である。

農業を続けてきたのは、先祖が受け継いできた農地に愛着があり、荒らせないということと、現在では年金を受け取っているため農業をしなくても生きていけるが、収穫の喜びやお客様との繋がりによる生きがいのために作業しているという。またサラリーマンのように雇われるのではなく、自分で思うようにできることも農業の魅力だという。

3.2 利益も重視する若手農家

30, 40 代の若手農家 3 人に自身の農業史、農業観についてお話をうかがった。

C さん（男性、30 歳、西山寺地区在住）

由比で生まれ育ち、家は代々農家である。東京の大学へ行き、4 年間会社勤めをした後、兄が家業を継ぐ意思がなかったため由比にて農業を始めた。3 ヘクタールの農地を持つ専業農家であり、由比では 1 番若手の農家である。両親がしっかりと農地を管理していたため、予想よりは苦労せずに作業できているという。最近はこの農家も子に農業を継がせたがらないが、C さんは、農業をやめると今まで自分の家のミカンを楽しみにしてくれたお客が残念がるため、人との繋がりを大切にしたい、壊すのは楽だが作るのは大変だと考えて農業を受け継いだ。

現在は収入の増加を目指して、身内で管理できる範囲で農地を増やしていく予定である。過去に 1 ヘクタール増やしたときには、荒廃園地を畑にするため、市から 50 万円ほどの補助がでた。出荷ルートは半分が直売所（ドリームプラザ、富士川楽座、新東名サービスエリア）で、残りが農協と小売り（客から直接注文を受け販売）である。直売所は市場より安い価格で販売でき、自分の収入も多くなるため積極的に出しているが、農協を通すと客の手に渡るまで、農協、市場、商店と手間がかかり、価格も上がって収入も少なくなるので、あまり出さない。

由比には「みかんが安いから投資しない→適当なものを作る→売れない」という負の連鎖を持つ農家、また「いいものを作るため投資する→質のいいミカンができる→売れる」という正の連鎖を持つ農家があるという。今後の由比の農業についてお聞きしたところ、ミカン農家は減っていくだろうが、その分みかんの単価があがり、いずれ少しずつ盛り返すのではと前向きに語っていた。

D さん（男性、40 歳、阿蘇地区在住）

家が代々農家で父も農家をしていたため、幼いころからなんとなく農業をするのだろかなと思っていた。跡取りでも農業を継がない人は多いが、進学先の農業大学で農家の息子が多かったこともあり、受け継ぐことが自然な流れであったとのことだ。

ミカン、イチジク、ブルーベリー、キウイを育てている専業農家で、2.5 ヘクタールの農地を持っており、内訳はミカン 1.85 ヘクタール、ブルーベリー 40 アール、イチジク 25 ア

ールである。ミカンは14種類作っており、ダイレクトメールなどを使って売っている。三ヶ日ミカンといったブランド力が強い地域は、規模も大きいため農協を通じても売りあげがあるが、由比はブランド力では劣り、規模も小さいため農協を通じても大きな売り上げにはならない。由比で売り上げを上げたければ独自に販売経路を切り開く必要があるという。そのため由比において農家と農協との関係はつかず離れずといった距離にあるとDさんは言う。また幼稚園児を対象にしたミカン狩りも行っている。ブルーベリーは市場に出す他にブルーベリー狩りも行っている。ブルーベリー狩りの客層は静岡市内の方が個人で予約をとるのが主で、ツアーなどのまとまった人数での予約は農地への遠さなどが理由でなかなか入らないのが現状である。また、割れてしまったブルーベリーは長野の工場でジュースやジャムに加工して販売している。2年ほど前に、ブルーベリー畑を栽培していた農家がやめるところを、せっかくなのでということで受け継いだ。イチジクも、収穫量としては少ないが、単価が高いので軽視はできないという。

兼業しない理由は、しっかりしたミカンを作らないと商売にならないし、ミカンの栽培以外にも流通経路の整備といった運営的な仕事もあるので、ミカン農家の場合は農業で生計を立てなければ兼業する余裕はないとのことだった。しかし、年をとって農業をする体力がなくなった場合に農地を減らして兼業することは理解できると語っていた。

農業は特殊な職業で、家族や家といったプライベートと仕事との距離感が非常に近い。家族の手伝いなしでは作業できないし、時には子供と遊んでやることもできる。そういった家族との関わりを多く持てる面はサラリーマンにはない農家ならではの利点であるという。また、自分の農作物を楽しみにしてくれるお客さんとの繋がりなど、豊かな人間関係を築きやすいことが農業の魅力の一つである。

Eさん（男性、44歳、阿蘇地区在住）

家は農家であり、自身が30歳になり結婚したのと、父が農協の役員になり忙しくなったのを機に農業を始めた。それまではバイトや職人仕事などを転々としており、いつかは農家を継ぐとは思っていたが、こんなにも早く、また農業で生計を立てていくことになるとは思っていなかった。最初の10年は園地改造に力を入れてハード面を整備し、ここ5、6年で腰を落ち着けてミカンと向き合っている。販売ルートは5、6年前から始めた楽天でのインターネット販売が9割で、農協とはほぼ関わりはない。現在インターネットで売上が少しずつ安定してきたが、販売も肥料も農協とはほぼ完全に関係をもたないため、この先ミカンが売れにくくなったら都合良く農協を頼るといったこともできないので、いい商品を作る必要性を強く感じるという。ネット関連については奥さんが管理しており、それがなかったら今の販売経路は存在しないそうだ。

由比は小さな町で、他の主なミカンの生産地に比べると、ブランド力や規模では勝てないため、農協任せにするだけではなく自ら流通経路を切り開く必要があるとEさんは考えている。また、たまたま自分の家が土地改良事業で平らにされた作業しやすい土地を持ってい

たからいいが、もし傾斜地の農地のみでは農業を始めなかったかもしれないとも語っている。

農業を始めた時は本腰を入れずにやるつもりであったが、時間がたつにつれて自分の農地やミカンに愛着が湧いてきたという。ミカンは稼ぎが少ない産業ではあるが、兼業をして農業を手薄にすることはしたくないという。傾斜地の農地もあり、そこは荒らそうとも考えたが、農業で生計を立てるには中途半端なことはできないため続けたという。

Eさんは、働く目的として、「稼ぎたい」ということが大前提としてあるという。稼ぎたいという欲があるからいいものを作る、高く売れる販売経路を確保する、農地を整えるといった手間をかけることができ、「やりがい」といったものは2次的についてくるものだという。稼ぎたいとなると当然ながら企業勤めのほうが安定して高収入を得られるが、キャリアを積むうちに出てくるミカン、農地への愛着や、雇われの身ではないという自由さ、あとはある種の開き直りのようなものが農業から離れられない理由になっているという。

Eさんの持論として、農業を続けるには、いいものを作る手間、質素な生活をするといった我慢、また農業に熱心に取り組んでいた両親の協力、いい農地といった作業しやすい環境、いいものを作る意気込みやプライドが必要であるという。Eさんは農業に特別なやりがいや魅力があったわけではなく、反対にマイナス面のほうが多いと感じているが、農業でいかに稼ぐか考えるうちに、人には真似できない立派なミカンを作らないといけないという哲学を持つようになったという。最初は仕方なく始めた農業だが、それで今どうやったら稼げるか試行錯誤した結果が、専業農家として妥協なく農業にむきあうことにつながったようだ。

3.3 専業農家における傾向

現在由比において、販売農家の約20パーセントが専業農家である。

60代以上のベテラン農家においては、農業を通じた人との繋がり、健康維持などの「やりがい」に大きな価値を持つ方が多かった。さらに企業等を定年退職してから農業を始めた方も同じ傾向があった。

若手農家においては、ベテラン農家に比べて金銭的な利益を追求する傾向があり、そのため質の高い農作物を作る、農地の規模を大きくする、利益の高い流通経路を開拓するといった努力により力を入れられていた。しかし、金銭的な利益を追求するのであれば、他の職業のほうが効率よく高収入を得やすいが、ベテラン農家と同じくやりがい、または農業のライフスタイルの魅力が、結果的に生業として農業のみを選択した要因となっているようだった。またお話をうかがった若手農家の全員が、農業開始時に区画整備による作業しやすい平坦な土地や、同じく先代の農家であった両親の協力などの農業をしやすい環境がある程度整っており、それが農業を始める上で大きな後押しとなったようだった。

双方の専業農家に共通する点として、農業になにかしらの魅力を感じていること、また質のいい農作物づくりを指向している点が挙げられる。

4 半農半漁の農

4.1 兼業として漁業をする農家

現在由比の 8 割の農家が兼業農家である。その中でも山と海との距離が近い由比の特色ある就農形態として、サクラエビ漁と農業の両方を手掛ける半農半漁がある。半農半漁に携わっている 2 人の農家の農業史、農業観をうかがった。

F さん（男性、45 歳、今宿地区在住）

清水で生まれ育ち、26 歳の時に、畑と船を所有していた船元の家に入婿した。2, 3 年サラリーマンとして働いた後、義父の病気を機に半農半漁に携わるようになる。半農半漁にかかる労力は農業のほうが大きいですが、収入においては完全に漁業が上回っている。サクラエビ漁のみでは収入が少し足りないため、義父母から引き継いだ農業をしている。他のサクラエビ漁師はバイトや他の漁の手伝いをする人が多い。本業の漁師はシラスや他の漁を手伝うが、F さんは桜エビの 40 日のみであるため、漁師としては海に出る期間が短い。また由比の専業農家は 2 ヘクタールほど耕作するのに対し、F さんは 50 アールほどであるため農家としては耕作する土地が少ない。以上の理由で自らのことを農家としても漁師としても中途半端、どちらでもないと思っている。自宅は天候が荒れたときに船を守るため海の方にある。天候が荒れた時に山の畑はどうしようもないが、海は船にロープをかけるなり、なにかしら対応できるからである。

農業をしている人が漁業にシフトしていく例は多かった。半農半漁をする農家は、60 歳以上で「乗り子」としてサクラエビ漁に参加することが多いという。農家を中心として漁業に携わるのは非常に少ないという印象があるそうだ。若い方で半農半漁をする方は 2, 3 人しかない。

親の代で農地が荒れていると子供は確実に農業をしなくなるという。農業から漁業への移り変わりは顕著で、70 歳くらいの方が「30 年前は金払いが悪いのは漁師だったが、今では農家のほうが悪い。」と語っていたそうだ。商売にならないために親の代で農地が荒れると子供は確実に農業をしなくなるという。サクラエビは商売になるから投資もされるし、後継ぎも出てきているが、農業は反対の道を行っていると F さんは感じている。

サクラエビ漁に従事する日は、15 時に漁の支度、17 時に漁港に集まり大井川の漁場まで 1 時間 40 分かけて船で行き、19 時に網掛け、21 時に漁が終わり、23 時に帰宅する。婿に入って船元になる人は多いという。サクラエビ漁のみで、乗り子は年 200~300 万円ほど、船元は年 500~750 万円ほど稼ぐが、船元は船のメンテナンス代として出費が多いため、どちらが儲かるというわけでもないそうだ。船は由比全体で 40 隻ほどあり、2 杯 1 組の夫婦船として出る。

農業については、漁がある時は午前中だけ作業するが、休みの日には午後もおこなう。ミ

カン品の品評会で賞をとったが、小さい規模の農地で管理しやすいため、結果的にきれいなものが穫れるだけだという。自ら価格設定ができる小売りがほとんどで、二等品は無人販売に出している。平坦で区画整備されている土地だと除草剤散布、農薬散布、収穫などが楽だが、由比は傾斜地で土地の所有も複雑に入り組んでいるため、多くの点で作業しづらいという。

ミカン栽培をはじめた当初は、12月に収穫して1、2月に出荷する「青島」、3月に収穫して4月に出荷する「きよみ」を育てていたが、サクラエビ漁の時期（春漁3月下旬～6月下旬、秋漁10月下旬～12月下旬）と重ならないように、それらの収穫数を減らし、1月に収穫して2月に出荷する「はるみ」、2月に収穫して、3月に出荷する「デコボン」、他「レイコウ」、「せとか」、「するがエレガント」などの単価も高い中晩柑（1月～5月ごろまでに収穫される、温州ミカン以外の柑橘類）を多く育てるようになった。ただし、中晩柑のほうが、単価の高い実をつけ、木に負担をかけないための摘果作業や袋かけなど手間はかかる。それらの技術は経済連の柑橘セミナーなどで少しずつ覚えていった。農地は神ケ道（20アール）、池ノ谷沢（10アール）、芦野（9アール）、ヨフケナシ（以前は15アールだったが、2011年9月の台風で半減）の4か所の計約50アール持っている。ミカンの価格低下や台風、イノシシ、病気による被害のため荒地にしているところも多く、農業を始めた当初は75アールあった土地を30アールほど減らしたという。農地を減らさないと作物を管理しきれないとのことだ。今後体が動かなくなれば農業はやめる予定である。菊を栽培した時期もあったが、するが路農業協同組合から清水区内の事業所が統合され清水農業協同組合になったことで市場が変わり、安くしか買ってくれないため、現在は小売りで少し販売程度である。農協合併前はイベントを開いたり、いい値で売ったりしやすかったが、合併後は組織が大きくなり農家の意見が通りづらくなったと感じている。また農地バンクといった農業をしたい人に土地を貸し出すような制度があるが、借り手が求めているのは作業しやすい平地で、わざわざ傾斜地を借りる人はいないという。

農業は収入を得ても、農地、作物の管理のため多額の支出があり、労働時間も長くて割に合わない効率の悪い職業だという。それでもFさんが農業を続けていく理由は、年を重ねると雇われるのも面倒、親が大切にしてきた農地を守りたい、品評会で賞をとれることは純粹にうれしく、やりがいになるといったことである。漁業も農業も特に好きだったわけではなく、婿として入った結果始めた職業であるとも語っている。もし農業の大変さをあらかじめ知っていれば、やらなかった可能性はあるそうだ。

Fさんが農業を始めたころと今とは、由比の畑の風景もミカン自体も大きく変わった。畑がどんどん荒地になり、昔はいいものを作る先輩農家たちが大勢いたが、今ではミカンが売れないため、手間がかかっていない質の悪いものを作る農家も増えたという。現在由比の農業全体として、「ミカンはお金にならない→手をかけない→お金にならない」といった悪循環があるという。しかし、その中でも農業に力を入れている方もおり、農業に対する取り組みが2極化する傾向にある。またうまく後継者がつながっている農家は親がしっかりとミカンを作っているところが多いという。2、3年放置すると農地は使い物にならないそう

だ。

G さん（男性、59 歳、西山寺地区在住）

元々専業農家だったが、15 年ほど前の土地改良事業で自分の土地の一部（全体の 170 アール中 50 アール）がたまたま対象の農地の一部に入っており、改良される間の収入不足を補う形で、乗り子としてサクラエビ漁を始めた。春漁は 3 月下旬から 6 月上旬までに 20～24 日ほど、秋漁は 10 月下旬から 12 月下旬まで 13～17 日ほどあり、少しでも海の状況が悪ければ出航しないため、漁期は平均して約 3 日に 1 回ペースで海に出る。現在収入の 3 分の 1 がサクラエビ漁であるが、将来的には専業農家に戻って農業に手間をかけていいものを作りたいという。専業時と兼業時で、収入はそれほど変わらないという。

現在は販売目的で農業に取り組みながら半農半漁に従事している人は少なく、漁師が畑を持っていたとしても、自家栽培程度の小さな規模で従事する、もしくは土地だけ所有している人がほとんどであるそうだ。しかし、昔は今よりは大きな規模の農業を漁業と兼業していた人がもう少し多かったという。しかし、それらの人も専業に比べると小さな農家がほとんどである。G さんの農作物の流通経路は、農協が 5 割、直販が 4 割、市場への出荷が 1 割ほどであり、農協は手数料などで多くの収益は見込めないが、直販は自分で価格をつけられるため収入になるという。

農業をする理由としては、自分が経営者として、しがらみなく自由に活動できることで、なにより農業が好きであるという。由比は農業に力を入れる人は力を入れる、力を入れない人は入れないといった様子で中間がおらず二極化しているという。

4.2 半農半漁をしている方の傾向

半農半漁についての農業と漁業のバランスは船元か乗り子かで異なっていた。労働時間においては両者とも漁業より農業の方に時間を割いていた。しかし、収入においては船元の方は収入のほとんどが漁業を占め、乗り子の方は農業のほうが収入の多くを占めていた。

また、一部の農家の方に行ったアンケートにおいて、由比の農家全体の中で半農半漁をされている方の割合を聞いたところ、昭和 40 年代にミカンの価格が暴落したのを機に、収入を求め農家の一部がサクラエビ漁の船に乗り、農業と漁業の兼業化が進んだが、その半農半漁の形態をとる農家数は年々減少し、現在では半農半漁をする農家は由比の農家全体の 5 パーセント未満しかいないという回答が多かった。また半農半漁をする農家に 60 歳以上の方が多いことも上記の理由である。減少の理由として考えられるものには、農業では十分な収入を得られないため、農業から撤退して漁業とほかの職業との兼業を選択した、またサクラエビ漁の近代化が進み、船の乗組員の数が少なくなったことを受け、漁業から撤退せざるをえなかった半農半漁の農家が多かったことが挙げられる。

現在数少ない半農半漁をする農家の方は、漁業で主な収入を得つつ、先祖から引き継いできた土地を守らなければいけないという責任感から農業に従事する、また農業を続けるた

めの収入源として漁業をしていた。サクラエビ漁と柑橘栽培の労働時間と時期の組み合わせのしやすさによる双方の兼業によって、主に収入の面で漁業が農業を支えている印象を持った。

5 日本の農業を支えるもの

現在の日本において、農業は非常に稼ぎにくい産業と言われている。生産性の高い農業を展開するアメリカなどの農業大国からの安価な農作物の輸入により、国内の農作物が売れづらい状況にある。またまさにこの報告書を書いている 2015（平成 27）年、日本の環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）への参加が大筋合意に達し、自由貿易がさらに加速することを受け、国内農業へのダメージはより顕著になるという声もある。特に由比のように特別なブランドを持たない柑橘系の果樹を中心に栽培している地域においてはその傾向は著しいとも言われる。また若者を中心とした農業人口の流出もあり、1960（昭和 35）年に比べ 2010 年の農業従事者数は約 6 分の 1 に減り、またその 7 割以上が 60 歳以上の農家であり、農業従事者の減少と高齢化が進んでおり、農業の規模は縮小傾向にある。加えて由比では、足場が悪く作業が困難な急傾斜地に展開する農地がほとんどであること、進学や就職などで若者が遠方に移り住むようになることが多いことも農業従事者の減少、高齢化を進めている要因となっている。

しかし、日本の農業は市場社会の外で大きな役割を持つこともある。例えば、食糧の安全性への信頼、木や作物が植えてある農地が地滑りや洪水を防ぐ機能、農村の風景や行事がもたらしてくれる生活の豊かさなど、農業は代価を支払われることのない多面的機能を持つ（祖田・杉村 2010）。由比の農家の方は地元での直販やインターネット販売などの新たな流通経路の開拓や、多品種を植えて収穫時期をずらすことなどによる農作業の効率化、または兼業などによって経済活動を成り立たせると同時に、農業が大きな収入にならなくても、健康維持や、コミュニケーションツールとして、自分の土地や農作物への愛着、農業のライフスタイルへの魅力から農業に従事する方も非常に多かった。

由比の農家たちに共通することは、それぞれが工夫をして農業に取り組み、また経済活動としてだけではなく、農業になにか自分なりの意味を見出していることである。農業が生活上の関心の核として意味づけられることが、現代において農業生産が可能になる要因の 1 つと考えられる（祖田・杉村編 2010）。その意味は、先祖代々受け継いできた土地や農作物への愛着からそれらを守り続けたいという意味、生活と農業が密着しているため家族との時間を持ちやすいこと、農業を通じた人間関係を楽しみとしていること、都市生活や企業勤めのストレスから解放されたい、向いていないという気持ち、老後の健康維持のため、自然との距離が近い豊かな生活をしたいなど個人によって多種多様である。絶え間ない農家の努力と、市場原理を超えところにある農業の魅力が、決して簡単ではない農業の継続を支えていた。

謝辞

本調査をおこなうにあたり、由比の農かをはじめとして多くの方々にご協力をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

参考文献

祖田修・杉村和彦編

2010 『食と農を学ぶ人のために』世界思想社。

農林水産省統計情報部

1962 1960 年世界農林業センサス市町村別統計書。

1971 1970 年世界農林業センサス静岡県統計書。

1981 1980 年世界農林業センサス静岡県統計書。

1991 1990 年世界農林業センサス静岡県統計書。

2001 2000 年世界農林業センサス静岡県統計書。

由比町史編纂委員会編

1989 『由比町史』静岡県由比町教育委員会。

由比町史編纂委員会編

2008 『由比町史 補遺』静岡県由比町教育委員会。

静岡県交通基盤部河川砂防局河川企画課

2015 しずおか河川ナビゲーション(2015 年 7 月 14 日取得、<http://www.shizuokakasen-navi.jp/index.html>)。

農林水産省

2012 2010 年世界農林業センサス報告書(2015 年 7 月 14 日取得、<http://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/2010/houkokusyo.html>)。